



日本の国内便の飛行機は現在では、沢山の便がほぼ満席で、東西南北を飛んでいる。さて、その飛行機の座席番号に「4」の座席が無い事を覚えている人は何人いるだろう。今度、乗るときは是非確かめて見てください。ついでに「9」(苦)も。

日本民族は太古より、「4」は「死」と同音で発音する為、忌み嫌ったのである。同じ事が「詩」についてもいえる。「詩」と「死」である。唐木順三の著書のタイトルに「詩」と「死」という名著がある。

この国では、「詩」といふものは、書店を見ても、文芸誌を見ても、片隅に押しやられている。乱暴な言葉を使えば、あっても、なくても良い「モノ」という印象さえ受ける。

ポーランドでの留學生活で、その考えがまちがっていた事を深く気づかされた。ポーランド人にと

っては「詩」というものは「パン」と同じくらい「聖書」と同格の、人間にとって一番、スバラシイ芸術という認識がある。「詩」に対しての「尊厳」、「敬意」の気持ちを持っていることを強く感じた。ポーランド文化の最上位の芸術が「詩」である。



= 朗読 =  
「午後のポエジア」  
について  
霜田 千代麿

松明のごと、なれの身より火花の飛び散るとき／なれ知らずや、わが身をこがしつつ自由の身となれるを／持てるものは失わるべきさだめにあるを／残るはただ灰とあらしのごと深淵に落ちゆく昏迷のみなるを／永遠の勝利のあかつきに、灰の底ふかく／さんぜんたるダイヤモンドの残らんことを・・・  
—ノルビット作「舞台裏にて」—

さて、「午後のポエジア」の例会ですが、希望する者は誰でも、参加出演できます。ポーランドに関係したモノ。ポーランド人と日本人の合作で作っています。今年は歌や踊りも、披露されます。乞、ご期待！

(しもだ・ちよまる) 副会長

午後のひとときを一緒に！  
紅茶 ケーキ 朗読 音楽



すべて入場無料

お申込み・予約不要。直接会場へお越し下さい！

主催 / 北海道ポーランド文化協会

後援 / 駐日ポーランド共和国大使館・ポーランド広報文化センター・札幌市・札幌市教育委員会

交通 / 北海道大学クラーク会館 北区北8西5 地下鉄札幌駅から徒歩5分

お問合せ先 / TEL/FAX:011-790-8610 (事務局)



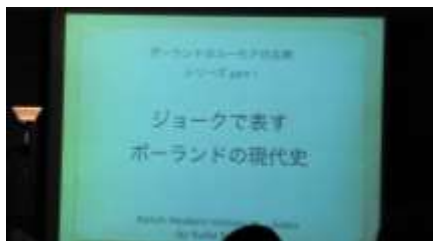
# 午後のポエジア

## 「午後のポエジア」報告

尾形 芳秀



◆ 斎田 道子 「越境する霧」より



◆ ラファウ・ジェブカ  
「ポーランドのユーモアの古典」



◆ マズル・ミハウ  
「ポーランドのオノマトペの詩」



◆ 氏間多伊子 「外郎売」口上から



◆ 大久保 律子 ポーランド民話  
「くった、のんだ、わらった」



♪ ヨアンナ・クンツェヴィッチ  
「新しい日が来るで」ほか



◆ シャレック・レナタ 「エレジー」ほか

今回の「午後のポエジア」は第三回目の開催となる。霜田副会長の発案で日本とポーランド文化の交流という見地で始められたという。ポーランド文化に大変造詣の深い氏ならではの発案であったと思う。まだ一般市民にはあまり周知されていないものの当日は50人近い来場者があり盛会であった。

東京では前任の駐日大使ヤドヴィガ・ロドヴィッチ女史の「ショパンと能」という試みもあった。近年ポーランド文化を知る機会が札幌でも身近になったことは大変喜ばしいことである。

さて、ポエジアというのはポーランド語で「詩」という意味であろうか。舞台には霜田氏による気迫のこもった力強い書がアートのように掲げられている。文字通り日ポの文化の融合がこれ一枚に表現されているように見える。演ずる人々に気を挿入させるかのようにふさわしいものだ。毎回感じ入っている。

毎回特に感じるのは、出演者はポーランド文化によく精通されているということである。ただ単にポーランド大好きというレベルではないように思う。詩の朗読にもそれぞれの主張が感じられる。しかし、ポーランドの歴史とか時代背景の知識がなければなかなか理解しがたいものもあった。ドイツのホロコーストやソ連の統治下で抑圧された歳月を過ごしたポーランド国民は、詩、風刺小話、反戦歌という表現手段で抵抗したことはよく知られている。

ポーランド側は日本にはあまり知られていないものをさりげなく伝えたいという彼らの民族の誇りのようなものが感じられた。日本側もポーランドのことをよく理解したものが感じられた。特に内容や演技には甲乙つけがたいものだった。演者にはそれぞれの出し物に自信があったのであろう。

日本文化をポーランド人に伝えた「外郎売」は秀逸だった。そしてポーランド側からは歌と大正琴を即席状態で演じ何時もながら聞かせてくれる。自作詩と武藤類子の福島からのメッセージの紹介やブロニスワフ・ピウスツキの顕彰碑と知里幸恵の詩もタイムリーだった。日ポの共演で「友達」の内容はわからなかった



出演者たちのカーテンコール



最後にご来場者に挨拶する安藤会長

が師弟共演が微笑ましかった。真打は何とんでも「銃と十字架」であった。映像と朗読を組み合わせた試みは、演者のポーランド国民に寄せる尊敬と深い悲しみが強く感じられた。最後に、日ポの演者の余韻を振り返るように、篠笛奏者によって静かに幽玄な響きが場内に響きわたった。日ポの相互融合が深まったと思える瞬間だった。

今後も「午後のポエジア」が続くことを願っている。そして、もっと多くの市民が参加できるような工夫も必要だと思われる。

最後に何時もながら、ポーランドの人々によるお手製のケーキを参加者に振舞っていただきお礼を申し上げたい。中には、初めてポーランドのケーキを味わった、と嬉しそうに感想を述べられていた参加者もいたことを申し添えたい。

<文・写真>運営委員 (おがた・よしひで)



■ 書籍、人形、タペストリー、緞帳なども展示



■ いつも人気のポーランド製ケーキ。その出来栄えに写真を撮る観客も。



◆ 福原 光篠(篠笛演奏)  
「竹の唄」、「童神」、「竹田の子守唄」



◆ 霜田千代磨 「銃と十字架」



◆ オレヤヅジュ・シルヴィア ◆岩田 真由美  
「トマトソースの中の魚缶詰」、「友達」



◆ 長屋 のり子 「自作詩」から



◆ ウカシュ・ザブウォニスキ「ポーランドのジャズ」ほか



◆ 小林 暁子  
「銀の滴降る降るまわりに」から